えにしの会
「闇を生み出す構造・改革への道」

東京新聞特別報道部記者・木原育子（いっちゃん）
（精神保健福祉士、社会福祉士）

■自己紹介

2007年中日新聞入社（現在16年目）

石川・小松支局、大津支局（県警担当、県政担当）、浜松報道部（市政担当、企画班）を経て、東京本社（東京新聞）へ

2015年08月～東京新聞社会部
　戦後70年取材班、都庁クラブ、警視庁クラブを担当
2020年08月～現在東京新聞特別報道部
　　（福祉全般、精神医療、更生保護、アイヌなど民族問題担当）

※2020年4月～日本社会事業大学通信制（社会福祉士課程）
※2022年3月　社会福祉士試験合格
※2022年4月～日本社会事業大学通信制（精神保健福祉士課程）
※2023年3月　精神保健福祉士試験合格

■特別報道部
・1968年3月2ページ見開き特集面「こちら特報部」が登場、今年で55年。
・キャッチフレーズは、「ニュースの追跡」「話題の発掘」
・見開き2ページ、敷地が大きい紙面…ゲリラ部隊…
・民主政治、原発、死刑制度、精神保健など、記者それぞれが深堀りしたニュースを

(第3種郵便物認可)　東京新聞

こちら特報

アイヌ 多様な知と感性

北海道 先住民族を学ぶ私立校設立へ
沖縄 のNPO代表 奮闘

アイヌ民族や歴史を学ぶ授業が特色の私立学校を北海道に開校する計画が進んでいる。奔走するのは、沖縄県でフリースクールや自主夜間中学を営むNPO法人「珊瑚舎スコーレ」代表の星野人史さん(74)だ。北海道と沖縄―。共通点は、独自の文化と差別・抑圧された歴史を持つことだ。マイノリティー（社会的少数者）への差別を禁じる包括的な法制定をめぐる動きが活発化する中、星野さんの試みはどんな意義を持つのか。（木原育子）

学校名はアイヌ語で大地を意味する「モシリ」と、沖縄の言葉で庭を意味する「ナア」を取り、「モシリナアスコーレ」（大地の庭学校）。星野さんは「人は『自分を創る』生きもの。

ビデオ会議システムについて思いを語った
北海道で開校予定の年後のイメージ図

稲区に六千六百平方メートルの土地を取得済みで、二〇二五年度の開校を目指す。

言葉の大切さを知ること、文章を書くこと、芸術表現、野外作業などに力を入れる。欠かせないのが、

持たなかった民族の崇高さ、森羅万象に対する向かい合い方。和人の考え方との違いに「目が開かれる思いだった」。

それはアイヌだけではなく、沖縄の歴史もだった。

専修学校に改組した。モシリナアスコーレも、この学校法人が運営する計画だ。

学校名はアイヌ語で大地を意味する「モシリ」と、沖縄の言葉で庭を意味する「ナア」を取り、「モシリナアスコーレ」（大地の庭学校）。星野さんは「人は『自分を創る』生きもの。

言葉の大切さを知ること、文章を書くこと、芸術表現、野外作業などに力を入れる。欠かせないのが、

輝き続けることを願っている。「体験としての学び」を通して自由と自立、平和を求める意思を手に入れる手助けをしたい」

意味する。それはもちろん、北海道と沖縄を指す。星野さんは未来を語る。「北海道と沖縄に小さな星が生まれ、輝き続けることを願っている。「体験としての学び」を通して自由と自立、平和を求める意思を手に入れる手助けをしたい」

(第3種郵便物認可)　東京新聞

こちら特報

「医療保護入院」今こそ廃止

障害者権利条約 初の対日審査

本人意思無視 家族関係にヒビ

「日本の精神科病院への入院の半数を占める「医療保護入院」。精神科の指定医と「家族等」の同意だけで、本人の意思にかからず入院させる制度だ。本人の苦しみもさることながら、その決断を迫られる家族にも重い負担を強いてきた。自分の大切な人がいつ精神疾患を患うかわからない。二〇二四年の障害者権利条約批准後、初めての国連の対日審査も始まる。この前近代的システム、日本もそろそろ本気でやめませんか。（木原育子）

七月中旬、東京都内。精神障害者を担当する家族でつくる「家族会」主催の講演会が開かれた。「自身の価観で接しても逆効果です」と、精神障害者の社会生活技能訓練（SST）に携わるカウンセラー、高森信子さん(76)が説いていた。

参加者はじっと耳を傾けたり、熱心にメモを取ったり。家族会を運営する女性(78)は、精神障害者の偏見は根強く、家族は孤立しがちだ、そうにしかすがる思いで来るかがほとんどです」と、うつむいた。

「子どもを守るためのつもりで、ドアを閉じたり、トイレに閉じ込めたり。五十代の女性も悲しげに口を開いた。天真らん漫だった二十代の息子が統合失調症になったのは五年前。交際していた男性との別れ話のもつれからだった。

幻聴があります、自宅を飛び出し警察に捜索願を出すこともある日、手に負えぬほど暴れたため、嫌がる息子を精神科病院に無理やり入院させたが、三カ月後に退院すると、長女との関係性は破綻状態になっていた。

「何であんな所に閉じ込めたんだ！」じゃめ、お母さんはうつたらそれがよかったんさんはうつたらそれがよかった。

「昔は五当四落」と言われた。元幹事長の回想は続く。五億円積めば当選、四億円だと落選という永田町の定説。「天下の自民党幹事長だから。全国の議員を選挙で当選させるのが一番の仕事だ」

つまり、政策活動費の最終消費は選挙ということか。「選挙が始まってから、カネ出しても意味がない。始まってから買収するバカはいない。選挙ではなく、日常の経費。たくさん秘書を雇えば、議員歳費だけではやれない」と。「あっても困るものではない。受け取ってくれて」

それは国会議員だけではなく、地方選もこういう。例えば、自民党対野党という構図の知事選の場合、「領収書はいらない」と渡すことはあった。別にその人のカネになるわけではないから」と話す。

政策活動費はそんなに必要なのか。自民党元幹事長は話す。「なくてもできるが、あったらあったで、みんな幸せだ。自分で稼いだお金ではないから、気前よく配れる。自分は違うが」

別の理由も明かす。「幹事長になって最初の仕事は、党の連帯保証人になることだった。自民党が銀行から資金を借りに入れていた時代もあったという。「銀行は、どこの党にどれだけ貸与しているかが公にできない。返金する際、使途が言えないお金は便利でもあった」

(第3種郵便物認可)　東京新聞

こちら特報

「自ら稼いだ金ではない 気前よく配れる」

政策活動費 どう使った？
元自民党幹事長が語る実態

手書きのサインが入った政策活動費の領収書のコピー

政党から政治家に支出され、使途を明かさず自由に使うことができる「政策活動費」（組織活動費）。政治資金規正法に埋め込まれた「抜け穴」だ。実際のところ、その穴からどんなふうに、どういったカネが流れていったのか。「こちら特報部」の取材に、自民党と旧民主党の幹事長経験者が証言。海外視察の餞別、事実上の選挙対策費、非公認候補の裏支援など、「表に出しにくいカネ」の実態が浮かんできた。（木原育子）

八月上旬、東京都内の少しひっそりとした広告会社。威厳を放ちながら、背広姿の自民党の元幹事長が現れた。

政策活動費の使途について取材している旨を説明すると、短く「ほう」。身体を少し前かがみに、声をさらにひそめた。証言は匿名が条件。「そのカネは、右から左に経由していただけ。別に幹事長が潤っているわけではない」。重い口を開いた。

政策活動費は、いわば領収書がいらない政治資金だ。自民党の場合、少なくとも政権与党に返り咲いた直後の二〇一三～一九年で、幹事長が受け取った年間平均額は十億七千万円に上る。「幹事長といっても、幹事長代行も幹事長代理も副幹事長も、すらすらいる。飲み食いしていうのもある。いつもご苦労さんと」

幹事長のポケットマネーということか。「（カネを）どういう風に割り振るかは幹事長の権限。決裁書があるわけではないから覚えていない」

話は、在りし日にも及んだ。「思いを共有する議員で、海外視察に行きたいと申し出た。当選回数が少ないと、とにかくカネがない。幹事長のところにお願いに行くと、気前がいい人で、ポンとくれた」

コロナ禍以前は、多くの国会議員が八月、九月に、海外視察に出掛けた。一人二百万円の公費負担もあるが、この元幹事長は「いわゆる餞別と称するものを渡していた」と明かす。

自民党幹事長室は、「こちら特報部」の質問に、政策活動費の目的について「党代わって党勢拡大や政策立案、調査研究を行うために支出している」と回答しているが、餞別もそれに含まれるのか。

海外視察に餞別／選挙へ「受け取って」

与野党対決 知事選では「領収書いらない」

(第3種郵便物認可)　東京新聞

こちら特報

旧統一教会系機関紙を読む

標的は反基地・脱原発
扇動的主張 実態よりも「物語」？
3.11直後に原発推進論

世界平和統一家庭連合（旧統一教会）を巡る議論では、金銭トラブルに意識が向きがちだが、注意すべきは荒ぶる言説もだ。教団系の政治団体「国際勝共連合」の機関紙を精読すると、沖縄の反基地運動や脱原発の活動を標的にし、扇動的な言葉で敵意をあらわにしてきたことが分かる。そもそも教団側は市民自治を疎ましく思う節すらある。彼らと接触した政治家は何を思うのか。「素顔を知らず」で済む話ではない。（中沢佳子、木原育子）

「沖縄に集へる左翼・過激派」。一九九七年九月、米軍基地の縮小と日米地位協定の賛否を問う沖縄の県民投票の記事で扇動的な横見出しが記された。報じたのは、勝共連合の機関紙「思想新聞」。基地にノーを示した投票結果に「過激派や県外からの左翼運動家が暗躍」と書き立てた。

この記事で、県が掲げたアクションプログラムの草案を作ったとされたのが琉球大の我部政明名誉教授（国際政治学）だが、「事実誤認だ。僕は関わっていない」と語いと、という百田尚樹氏の言葉や、米軍北部訓練場の工事反対派に機動隊員が向けた「土人」発言を擁護した学生組織SEALDsをアピールした。

その教団側と接点を持ったのが沖縄の保守系の政治家だ。自民の島尻安伊子元沖縄担当相は昨年の衆院選で関連団体の推薦を受けられた。九月の県知事選の出馬予定者では、元宜野湾市長の佐喜真淳氏が友好団体の会合に出席し、元衆院議員の下地幹郎氏も〇一年に関連団体の集会に出た。「当時所属していた自民党の議員として招かれた。今は関わりはない」と強調する。

標的になったのは脱原発運動だ。一九八九年の紙面では「あきれた反原発団体 市民団体装い 参院選に出馬」とあおった。

当時の紙面で取り上げられた人が木村結さん。今は、東京電力福島第一原発事故を巡る株主代表訴訟の原告で、旧経営者に十三兆円の損害賠償を命じる地裁判決を導いた。その木村さんは「特共連合に対し「原発のことを考えていない」とだけの息を漏らす。

思想新聞は福島の事故後、独特の論理を展開した。発生から間もない〇一年四月には「原子力が行政を歪曲し、その結果、今回の原発事故に至った」とうったった。「自分たちの存在を訴え、親和性のある自民党などに食い込もうとしている」と木村さんはみる。

辺野古埋め立てに反対する人たち（左側）とにらみ合う警備員＝沖縄県名護市の米軍キャンプ・シュワブのゲート前で

せないとの信念だけ、ひるまない。「戦争につながる基地の撤去は、悲惨な体験をした沖縄県民の願いだ。目立つ組織をだたいて、も、沖縄は頑まらない」

これまでの紙面では「沖縄の二つの新聞はつっさな」は「沖縄の紙面の主張に」は「沖縄の保守政治家で」は「沖縄の反基地に好意的ではない。「つく限られた読者が求める「物語」を書けば」

思想新聞は沖縄の日本復帰四十年に当たる二〇一二年、市民集会やデモを報じた際に「地元の過激労組と県外プロ活動家によって米軍基地反対闘争が仕掛けられている」と伝えた。

「政府への反対意見や平和運動が目障りなのだろう」。紙面でやり玉に挙げられた「沖縄平和運動センター」で顧問を務める山城博治さんはそう話す。

運動の源が再び戦争をさ

■こちら特報面で継続して問いかけ中…

東京新聞　こちら特報部

「基準緩和 許していいのか」

厚労省 見直し案で治療要件追加

身体拘束は厳格な基準がある。現在の精神保健福祉法に基づく一九八八年に出された告示で、①自殺や自傷が著しく切迫、②多動や不穏が顕著、③患者の命が危険な場合―と定め、あくまで患者の命の保護を重視する視点を貫いてきた。

だが、厚生労働省は二月に示した告示見直し案で、「患者に対する治療が困難な場合」との「治療要件」を追加した。精神・障害保健課の担当者は「多動や不穏が顕著」という表現は幅広い解釈を与える。対象を明確化するべきだとの意見があり、案を示した」と説明。「多動や不穏の要件がなくなったのではなく、この要件かつ治療要件とする。拘束の基準は、逆に厳しくなる」と力説する。

一方で、「精神科医療の身体拘束を考える会」代表で、杏林大学の長谷川利夫教授（保健学）は真逆に捉える。「厚労省は『AかつB』だから要件が厳格化されると言うが詭弁だ。医師が『この患者は治療が困難だ』と判断すれば、合法的に拘束できる可能性が高まる。これまで患者の保護が目的だったのに医師側の論理が出てきた。拘束基準の緩和と拡大にほかならない」

なぜ、治療要件を盛り込んだのか。長谷川教授は推測する。「例えばだが、向精神薬などの強制投与、すなわち強制治療ができるようにつなげる意図があるのではないか。強制治療行為の概念を導入することは甚大な改悪だ」と憤る。

見直し案は、厚労省の私的検討会でも議論されてきた。五月九日には、日本精神科病院協会の山崎学会長が参考人で出席、三時間余の会合で一時間にわたり、「一部の人が『ひどい』身体拘束が行われ、精神科病院へ入院している」と強調した。実は山崎学会長は元首相ともパイプを持つ政治力を持つ精神科病院グループ。一七一一九万～五百八十万人の会員を擁する支援報告書で厚労族議員ら「そんな背景の出席者」

「身体拘束」の件数の推移

「精神保健福祉資料」より

20年度は1万995件発生、高止まり続く

厚労省が開いた「地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制の実現に向けた検討会」＝5月30日、東京・新橋で

（第3種郵便物認可）

話題の発掘

拘束要件の緩和容認に批判

医療保護入院巡り 厚労省検討会

昨年十月から始まった、精神保健福祉の新たな体制についての話し合う厚生労働省の「検討会」が九日、終了した。医療保護入院の原則廃止の撤回を求める有識者から抵抗の声が上がっていた。進まぬ改革の背景に何があるのか。四回三十九人分の精神疾患を抱える当事者、ともに生きるには何が必要なのか。（木原育子、中川佳子）

「病院が怖くて怖くて、たまらなかった。また拘束されたら、殺されるかもしれないと思ってしまった」。「拘束」のような状態に入れられ、「殺されるんじゃないか」と思ったことがあった。身体拘束に大きな苦しさを感じたという。本当にやめてほしい」と訴える。

「病院 怖くて怖くて」

会見を開き、厚生労働省検討会のあり方に、疑問の声を上げる池田摩子護士＝中央＝＝8日、東京都千代田区で

別の男性（六〇）は、親の暴力が発端で、足首に血が出るまで縛られ、「殺される」と思ったという。「今は法の網の目に入れられ、『殺される』ことはなかったが、そんな病院ばかりではない」。そうも訴える。

精神科病院の身体拘束は二〇年度は一万九百九十五件。〇二年度に比べて二倍で高止まりが続く。公権力によって身体拘束を受けない人身の自由は近

精神疾患

420万人 進まぬ改革 なぜ

所のような病院はなくなってしまえばいい」と話した。

女性（五〇）は「自分は何けてされたのは、昨年二月に八十九歳で病気でこの方法を選んだのだ。本人が望んだ際の文書を出さなかった。

入日には、有識者らが会見を開いて抗議した。背景には、厚生労働省が「廃止」の撤回を求めたことがあった。

後藤和雄護士は「廃止はこの在院日数が長くなる。精神病院の動務が少ない。患者の説明もなく、国会の議論も経ず、この案は知らないうちに精神保健福祉法の根幹を変えてしまう。黙っていてはだめだ」と強調した。

本来、身体拘束は原則禁止と定められている。だが、精神保健福祉法では「拘束に必要な基準を定めることができる」として、同法に基づき厚生労働省が公示した基準を示し、「家族の同意を得た場合」などを定めている。

だが、厚労省は三月十四日、この公示案見直し案を示した。「家族の同意」の要件を加え、「医師の裁量を拡大する」ことを示した。

「家族の同意を得た場合」などの要件を加えた。「医師の裁量を拡大する」ことを示した。

精神科病院への隔離政策

「かご」40年 国の責任問う

新聞投稿で社会とつながる

原発事故で退院

精神科病院を「かご」と呼ぶ人がいる。約四十年という長きにわたり、精神科病院への入院を余儀なくされていた伊藤時男さん（七二）だ。入院期間中、職業選択や結婚など多くの自由を奪われ、「かご」から空を見ては鳥の自由を羨ましがれ続けた。退院した伊藤さんは今、国の隔離政策の責任を問うため、国家賠償請求訴訟を東京地裁に起こし、係争中だ。問われているのは精神医療だけではなく、近代以降のこの国の有り様そのものだ。（木原育子）

「暑かったでしょう」。七月下旬、群馬県太田市のアパート前。玄関を開けた瞬間、伊藤さんが満面の笑みでそう出迎えてくれた。

部屋はカラフルだった。食卓のテーブルにはやはりステンが飾られ、ソファには自ら描いた趣味の絵が積み上がる。「十年前まで一人暮らしなんて絶対無理だよと言われてきたんだけどね…」と苦笑いしながら、伊藤さんは話し始めた。

統合失調症を発症したのは十六歳。家を出て横浜や横浜で働き始めた頃だった。妄想が出るようになり、二度入院。そのたびに「脱走」した。

病院関係者に頭を下げる父親の背中が小さくふびんに思い、「もう悲しませないぞ。ちゃんと退院する」と誓い、父親が暮らしていた福島県に戻り、同県大熊町の精神科病院に転院した。この時、二十二歳。

「真面目に働いていれば出られる」と信じ、「院外作業」として、病院近くの養鶏場でニワトリのふんを処理する仕事を計十一年、プラスチック部品工場でも一年半働いた。対価は一日わずか三百五十円。症状は改善していったが、いつになっても一向に退院の話は出なかった。

主治医に申し出てもとりあってくれない。「もう無理かも…」。自信と気力が奪われていった。

病院には、伊藤さんと似た状況の人が多くいたという。閉鎖空間での生活は、「小さな社会」が生まれやすい。患者同士の恋もあったし、ご近所トラブルのようないざこざも。次第に小さな社会に安住し、自分から退院をあきらめていく。「施設症」に陥っていく。

そんな伊藤さんが、「本当の社会」とつながる道を見つけたのは、退院した一九八七年。「ちょうど、ソフトボール大会を撮影した伊藤時男さん。入院患者は見えない」＝2002年9月撮影、福島県内で、伊藤さん提供

退院し、趣味で描いた絵に囲まれながら一人暮らしをする伊藤さん。群馬県太田市で

あった。新聞だ。院内の仲間に誘われ、川柳を投稿したのが始まりだった。二〇〇七年の川柳は伊藤さんの心持ちがよく表れている。

アルバムに　亡父の鼓動　残ってる（一月）。入院中に父親が亡くなり、葬儀にも参列できなかった悔さが解放されて、それがおしまいではいけない」。二〇年九月、自らの長期入院は、国が隔離収容政策をあらためなかった不作為によるものだと、憲法が定める幸福追求権や移住や職業選択の自由を侵害されたと、東京地裁に提訴した。

ニュースの追跡

東京新聞　2022年（令和4年）12月8日（木曜日）　11版　特報　26

特報部　FAX 03（3595）6911　Eメール tokuho@chunichi.co.jp

障害者施策の根幹を揺るがす法案が、しれっと通りそうな気配だ。精神保健福祉法や難病法などの改正案５本を一括した「束ね法案」。わずかな審議時間で成立させようとする国の強引な手法に抗議するため、障害者らが12月の寒空の下、国会前で10時間を超える座り込みをした。声は届くのか。（木原育子）

強制入院拡大？

障害者支援「束ね法案」

このまま可決していいの？

「採決する気満々で許せない。障害者の仲間たちが強く反対していたことをしっかり歴史に刻みたい」。六日、国会前。座り込みを呼びかけた視覚障害者の古賀典夫さん（六三）がマイクを握り締め、そう訴えた。

反対の声が強いのが精神保健福祉法改正案だ。強制入院の大半を占める医療保護入院を存続させ、家族らだけではなく、市町村長の同意でもせないよう勧告を受けているのに、入院させやすい環境を整えて一体全体どうするのか」と憤った。

多くの障害者が口をそろえたのが、この国連勧告をないがしろにした点だ。日本は今年九月、障害者権利条約に基づく国連の対日審査で、多岐にわたる厳しい勧告を受けている。

審査をジュネーブで傍聴した脳性まひの女性も「勧告は

国会前座り込み

障害者本位で議論を」

医学モデルではなく人権モデルへの転換を迫っている。医学基準に基づいた法案は廃案にすべきだ」と求めた。車いすで座り込みに参加した脳性まひの鈴木敬治さん（七〇）も介助者を交え、「法案は撤廃にしてほしい。私たちの人権がかかっている」と言葉を絞り出した。

だが、十日の会期末が近づく国会で、法案反対のうねりは大きくなっていない。既に衆院を通過し、参院でも五日に審議入りした。

参考人質疑に立ってきた杏林大学の長谷川利夫教授（保健学）は「強制入院が拡大す

労相は「それぞれ関連するような内容で、審議会の議論でも連携をしっかり図ってとの指摘だった。一体として見直しを行うと淡々と答弁した。

政治評論家の小林吉弥さんは「野党も旧統一教会など大型法案に力点を置かざるを得ない」としつつ、再生可能エネルギー普及予算を原発事故処理に流用できる震災復興関連法案や、検察官の定年を政府判断で延長できる検察庁法改正案のケースを指摘。「どさくさに紛れて、反対が多そうな難しい法案を忍ばせる手は、昔からよくある常とう手段だ」

ら、こんな人生だったのかな」と、想像して涙んだ川柳も。新年に　我が家がかる　孫の笑み（一月）、リンリンと　鈴虫鳴いて　夫帰酒（九月）。伊藤さんは言う。「新聞に名前が載ることで、あぁ生きているんだって確かめていたんだ」

そんな伊藤さんの人生を変えたのが、二一年の東京電力福島第一原発事故だった。原発に近い病院は閉鎖され、伊藤さんは茨城県内に転院。そこで、入院が必要な症状ではないとあっさり告げられた。すでに六十一歳。驚いた。あの人院は何だったのかっていう思いと、今さらっていう思い」。グループホームでの二年の生活を経て、今は一人暮らしをする。投薬のみで症状は落ち着いている。

伊藤さんは言う。「退院できないことに絶望して何人も自ら命を絶った。自分だけが解放されて、それでおしまいではいけない」。二〇年九月、自らの長期入院は、国が隔離収容政策をあらためなかった不作為によるものだと、憲法が定める幸福追求権や移住や職業選択の自由を侵害されたと、東京地裁に提訴した。

ニュースの追跡

■日本精神科病院協会の山崎学会長インタビュー（2023年7月7日付）

東京新聞　（第3種郵便物認可）

こちら特報部

世界で最も身体拘束が行われている日本の精神科病院。厚生労働省では現在、拘束要件の見直しが不透明なまま進むが、精神科病院を束ねるドン・日本精神科病院協会（日精協）の山崎学会長（82）はどうとらえているのか。「こちら特報部」の単独インタビューに応じた山崎氏の言葉を詳報する。（木原育子）

精神科病院協会 山崎学会長に聞く

身体拘束

やまざき・まなぶ　2010年から日本精神科病院協会会長。22年5月の厚労省の私的検討会に突如、参考人として出席し、議論の風向きを変えるなど影響力が大きい。18年には協会の機関誌に「（患者への対応のため）精神科医にも拳銃を持たせてくれ」という部下の医師の発言を引用し、物議を醸した。安倍晋三元首相と親しかったことでも知られる。日本大医学部卒。

今月四日、日精協の会議室。山崎会長は予定より十分遅れて現れ、インタビューが始まった。

まずは身体的拘束。年間一万件超の拘束がある。

「基本的にね、精神保健福祉法に則った拘束なわけ。それについて何だかんだ言うのは変だと思うよ」

厚労省で拘束要件を見直す議論が進む。医師の裁量が増え、拘束件数が増える懸念を示す声がある。

「議論が進むのはいいが、現場としては、粛々と法律に沿った形で拘束する。当然じゃない？」

現場 法に沿っている

過去二十年で拘束件数は二倍に増えた。

「増えた増えたって言うけれど、厚労省が発表しているのは数だけ。病名や性別、年齢も発表していないから、具体的にどういう疾患で拘束が増えたか何もわからないの」

年齢や性別、疾患はこの場合、関係ないのでは。

「関係なくないよ」

どんな疾患でも、拘束されたことに変わりはない。

なぜ心が痛む？ 自殺・けがの方が心配

「中身の分析がなければ数字に意味がないって言っているの。拘束の数だけ発表してるのって変。分析できないのに答えられない」

そうでしょうか。

「精神科病院より一般医療での拘束の方がはるかに多い。知らない？　厚労省の班研究で施設内拘束って六万件あるんだぜ。そっちの拘束をなんで騒がないの？」（軽く机をたたく）

「拘束しないで、患者さんが逆に自殺したとか、転倒骨折したとかの方が怖い。医師が適切に判断していることをね、診察もしたことがないきみが、あーだこーだって言うのって変だと思わない？」「こっちだってね、好きで拘束やってんじゃない。拘束したら、監査の時にカルテを全部ひっくり返して見られてね、しかも診療報酬全くついてないんだよ、あれ」

山崎氏は拘束する権限をもつ精神保健指定医だ。

「拘束？　してますよ」

心は痛まないのか。

「はあ？　治療の一環で

海外 入院が少ないだけ

を全然現場を知らないきみが土足で入ってきて、心痛みませんかって何なの？　失礼だよ」

取材で心を痛める精神科医に多く出会ってきた。

「ぼくはそんなふうには考えない。適切に法律で決まっている。患者さんの安全を考えて拘束して、なぜ心が痛むの？　しないことで、もっと変な結果が出る方がおっかないじゃないか」

当事者は拘束しないでほしいと強く望んでいる。

「できないね。拘束して治療のプログラムに乗せるのが今の法律上の建前だ」

なぜ日本だけこんなに拘束件数が多いのか。

「海外は入院させないからだ。デポ剤（持続性注射剤）打って帰しちゃう。入院が少ないから拘束数も少ないんだよ」

じゃあ日本も今後は病院ではなく、地域で見守る態勢に本腰を入れるべきだ。

地域で見守る？ 誰が？ あんた、できんの？

「地域で見守る？　誰が見てんの？　あんた、できんの？　きれいごと言って、

ニュースの追跡

東京新聞　（第3種郵便物認可）

こちら特報部

続く理由

社会構造・偏見 変わんねえよ

確かに社会資源が少ない。

「障害年金たった年間七十万円で、どうやって地域で生活せんの？　できないよ。働けないんだぜ」

社会構造も変えないと。

「変わんねえよ！　医者になって六十年、社会は何も変わんねえんだよ。みんな精神障害者に偏見もって、しょせんキチガイだって思ってんだよ、内心は」

山崎氏もそう思うのか？

「ぼくは親父の病院を継いで二代目だ。小さい時から、閉鎖病棟で患者さんに遊んでもらって育った。たまたま不幸で病気になっちゃった人って思っている」

長期入院 僕は幸せだと思う

精神科病院に入院し続けることは幸せなのか。

「そう思うよ、ぼくは。地域で、アパートで一人暮らししながら、明日のことも分からず生活するのと、病院の四人部屋で皆で一飯食べるのと、どっちがいいかって言ったら、ぼくは病院を選択するよ」

三十年入院してても？

「出してどうすんの？　地域でマンツーマンで診れるならいいが財源も人もいない。支えているのはいつもボランティアじゃねえか」

国連障害者権利委員会は昨秋、日本の精神科医療での強制入院を問題視し、根拠法の全廃を勧告した。

「余計なお世話だよ」

勧告は重くないのか。

「重くないね全然。国連がそんなに権威のある機関だと思ってないもん」

事件など虐待は起き続けている。再発防止策は。

「滝山への入院は全部他院からの紹介だ。透析患者や難しい案件の患者をなぜ公立病院がやらないんだ。それを言えよ」

来年は診療報酬に加え、障害報酬や介護報酬といったトリプル改定になる。

「精神科も診療報酬を一般診療報酬並みにと訴えているが、全然だめ。精神科診療報酬は入院が九割。診療報酬の構造が違うわけ」

国連廃止勧告 余計なお世話

山崎氏の物言いは乱暴だし、多くの部分で肯定できないが、どきりとする部分もある。「きれいごと言って、結局全部他人事なんだよ」「六十年、社会は何も変わんねえんだよ」。精神障害者から目を背け、病院へ追いやることを是としてきた社会。ドンからの重い問いかけだろう。（歩）

デスクメモ　2023.7.7

先月、山崎氏は日精協の会長に再任した。八期目だ。なぜ会長職に留まるか。

「精神科医療を何とかしたいと思っている。財源がつかないとしょうがないでしょ」

当事者「退院したかった」

山崎会長の発言に当事者や支援者らは何を思うか。

四十年近く入院し、現在は群馬県内の地域で暮らす精神国賠訴訟原告の伊藤時男さん(三)は、長期入院を肯定する山崎氏に対し、「病院の立場としてはそうなのだろうが、私は一日も早く退院したかった。多くの人にサポートしてもらい、今が一番幸せ。山崎先生に教えてあげたい」と語る。

当事者でつくる一般社団法人「精神障害当事者会ポルケ」代表理事の山田悠平さん(三)も、「当事者は望まない入院に苦しんでいる。精神障害者を『かわいそう』として地域から締め出して病院に収容することで根深い差別構造を生んできた」と訴える。拘束要件見直しの議論については「身体拘束は行動制限の中でも非常に侵襲性が高い」とし、「告示を厳格にして高止まりしている実態にメスを入れてほしい」と求める。

支援者側はどうか。退院した当事者らと運営する福祉作業所「ほっとスペース八王子」施設長の藤井雅順さん(三)は、「どうやって地域で生活させんの？」という山崎氏の言葉に「現実との乖離がありすぎる発言だ。作業所などは確かに人員態勢や収入面での苦労はあるが、それぞれのペースに合わせて楽しみを見つけ生きている」

精神科病院への長期入院は違法だとする国賠訴訟の集会で話す伊藤さん＝昨年8月、東京都千代田区で

身体拘束に詳しい池原毅和弁護士は山崎氏の「拘束して治療のプログラムに乗せる」との発言を問題視する。「一般医療では手術後に、手術痕をかいて悪化させることを防ぐために拘束する場合はあるが、精神医療は一般医療と違い、治療のために拘束する手段は認められていない」とする。

「一般医療は治療の同意が取れた患者がほとんどだが、精神は半数が強制入院で、本人の同意が全く取れていないまま拘束されるからだ」と違いを指摘する。

「六十年、社会は何も変わんねえんだよ」という言葉には、病院からの退院支援を担う社会福祉法人「ひらいルミナル」理事長の河野文美さん(四九)も「退院支援に力を入れる精神科病院も出てきたが、地域の受け皿として事業所が増えない社会の弱さもある。病院だけの問題でなく、トータルな視点で地域移行を進めないと…」と話した。

日本障害者協議会の藤井克徳代表は「人権感覚はなく、国際規範すら切り捨てる。拘束についての持論は言い訳と居直りだ」と指摘。「これが、この国の精神科医療のトップの発言で、暗澹たる気持ちになる。こうしたリーダーを選び続ける日精協自体が問われる」

話題の発掘

■日本精神科病院協会の山崎学会長インタビュー

【心にノックを】
多くの人に現状を知ってもらうきっかけにしたいと取材打診

【インタビュー要旨】
・身体拘束について、「拘束しないで、患者が逆に自殺したり転倒骨折した方が怖い」と発言。「なんで心が痛むの？」
・「精神科病院に入院し続けることは幸せか」との問いに「そう思う」。
・「拘束して治療のプログラムに乗せるのが今の法律」と語った。
・退院を促し、地域で暮らす地域移行については「きれいごとだ」「地域で見守る？あんた、できんの？」
・強制入院の根拠法の全廃を勧告した国連障害者権利委員会を「余計なお世話」

【どう描く？】
→ありのままに。
優等生的紙面を捨てよう、多少お行儀悪くても…

→報道の仕事は、考える材料を提供すること、
考えるのは「読者」の皆さん…

→「炎上」正攻法、しっかり燃えさせる
まずは「議論を」・・・

⇓

<u>精神医療の矛盾を考えるきっかけに</u>

■日本精神科病院協会の山崎学会長インタビュー

・結果は賛否両論

山崎会長は悪くない派（擁護派）＝「悪意あるインタビュー記事だ！会長をおとしめようとしている」

「山崎さんの言っていることはその通りだ！」

山崎会長はけしからん派 ＝「山崎さんの発言は時代錯誤だ」「精神医療の恥だ・・・」

⇒擁護派の「声」をあぶり出す

…後ろめたさ、「ドキッとした」感情

…精神医療が変わらない「社会の正体」か

…見えなかったモノを見せていく

⇒「心痛みませんかって何なの。失礼だよ、きみ！」の意味

…（たぶん）踏み込まれたくなかった…実は心が痛んでいる？…「葛藤」に向き合えていない？

…葛藤なき拘束、<u>精神医療の「闇」</u>を作り出している

■異例の8期目会長が意味するもの

なぜ会長に留まる？

「精神科医療を何とかしたいと思っている。財源がつかないとしょうがないでしょ」（7月7日付「こちら特報部」インタビュー）

2024年はトリプル改定（診療報酬に加え、障害報酬や介護報酬）

⇓

強い政治力？

【会長職と政治】～オープン情報のみ～

2010年　日本精神科病院協会会長に就任
2013年12月24日　官邸へ
2016年7月22日　中華料理「湖宮」で食事
2016年7月23日　「富士ゴルフコース」（山中湖）でゴルフ
2016年9月1日　「叙勲」お祝いの席であいさつ
2019年7月24日　中華料理「湖宮」で食事
2019年7月25日　「富士桜カントリー倶楽部」
（富士河口湖）でゴルフ

首相の一日　23日

【午前】7時21分、宿泊先の山梨県鳴沢村の別荘から同県山中湖村のゴルフ場「富士ゴルフコース」。山崎学日本精神科病院協会会長らとゴルフ。

【午後】3時3分、別荘。6時31分、同県富士河口湖町のイタリア料理店「RICETTA」。秘書官らと食事。9時、別荘。宿泊。

首相の一日　22日

【午前】7時19分、宿泊先の山梨県鳴沢村の別荘から同県山中湖村のゴルフ場「富士ゴルフコース」。渋谷耕一リッキービジネスソリューション社長、加計孝太郎学校法人加計学園理事長らとゴルフ。

【午後】2時19分、別荘。4時1分、北村滋内閣情報官。11分、堀内詔子自民党衆院議員。15分、北村内閣情報官。7時29分、同県富士河口湖町の中国料理店「異彩中国菜館　湖宮」。山崎学日本精神科病院協会会長らと食事。9時41分、別荘。宿泊。

首相の一日　25日

【午前】7時1分、宿泊先の山梨県鳴沢村の別荘から同県富士河口湖町のゴルフ場「富士桜カントリー倶楽部」。山崎学日本精神科病院協会会長らとゴルフ。

【午後】2時36分、別荘。6時38分、同県富士吉田市の「炭火串焼I・W」。長谷川栄一首相補佐官、秘書官と食事。8時58分、別荘。宿泊。

一日　24日

森健良外務審議官、正木靖欧州局長、岡野正敬国際法局長。10時20分、ハンセン病家族訴訟原告団長

26分、官邸。27
国家安全保障局
48分、世耕
久佳経産事
藤俊英金融
、世耕経産
インスタイ
長。外務省
量博北米局
参院議長。
ロシアのフ
のアリーナ
。50分、山
事。1時10
総裁外交特
挙区で初当
分、東京・

ラム。39
分、2020年東京五輪の1年前準備状況報告会に出席し、あいさつ。50分、バッハ国際オリンピック委員会（IOC）会長、森喜朗2020年東京五輪・パラリンピック組織委員会会長。2時15分、小池百合子東京都知事。20分、東京五輪の1年前セレモニーに出席し、あいさつ。3時24分、東京・富ケ谷の私邸。5時46分、山梨県鳴沢村の別荘。6時29分、同県富士河口湖町の中国料理店「異彩中国菜館　湖宮」。山崎学日本精神科病院協会会長らと会食。9時6分、別荘。

【日本精神科病院政治連盟】

→2017～19年の**政治資金**収支報告書

安倍元首相や厚労族議員らの400万～580万円分のパーティー券購入

(その15)

(3) 政治活動費の内訳		項目別区分			組織活動費 (渉外費	
支出の目的	金額	年	月	日	支出を受けた者の氏名(又は名称)	支出を受けた者の住所(又は所在地)
セミナー会費	100,000	31	1	18	鴨下一郎新春賀詞交歓会	東京都足立区中央本町4-1-18
〃	100,000	31	1	18	福岡たかまろ君を励ます会	佐賀市白山1丁目4番18号
〃	100,000	31	1	18	自由民主党東京都第二十四選挙区支部	八王子市明神町4-1-2ストーク八王子205
〃	100,000	31	2	8	衆議院議員加藤勝信昼食勉強会	東京都千代田区永田町2-1-2衆議院第二議員会館1104号室
〃	50,000	31	2	8	秋葉けんや後援会	仙台市泉区上谷刈4-17-16
〃	100,000	31	2	27	清鈴会　代表　鈴木俊一	岩手県滝沢市鵜飼狐洞1番地432
〃	100,000	31	2	27	匠フォーラム	東京都千代田区永田町2-1-2衆議院第2議員会館1213号室
〃	100,000	31	2	27	彩の国自由フォーラム	東京都千代田区永田町2-1-1参議院議員会館718号室
〃	100,000	31	3	29	21世紀問題懇話会セミナー	東京都千代田区永田町2-2-1衆議院第一議員会館1102号室
〃	100,000	31	3	29	政経創造研究会　代表者　山口俊一	徳島市蔵本町3-8
〃	100,000	31	3	29	政経フォーラム	東京都千代田区永田町2-1-1参議院議員会館305号室

→2020年の**政治資金**収支報告書、元厚労副大臣に700万円の寄付も…

(その15)

(3) 政治活動費の内訳		項目別区分			選挙関係費 (陣中見舞金)		
支出の目的	金額	年	月	日	支出を受けた者の氏名(又は名称)	支出を受けた者の住所(又は所在地)	備考
寄附金	7,000,000	1	7	18	自由民主党香川県参議院比例区第七支部　支部長　木村義雄	香川県高松市松島町3丁目22-4	
〃	6,000,000	1	7	18	自由民主党東京都参議院比例区第七十八支部	東京都千代田区麹町1-3-5-401	

「見ようとしなければ見えない世界は確実にある。

その最たる存在が精神医療だと痛感した。

まずはこの現状を知るところから始めたい」

視点

私はこう見る

木原育子

精神科病院での実習を通して

「知る」ことから全ては始まる

最寄りのバス停で降りる際、小さな声が耳に届いた。「ここ精神科病院だよ」。思わず振り向くと、声の主のしかめっ面が目に飛び込んだ。社会にとって精神科病院は、そんな存在なのかもしれない。

私は十月の二週間、そんな精神科病院に通っていた。精神保健福祉士の資格を取るための実習だ。これまで「こちら特報部」で、日本の精神医療の特異性を伝えてきたが、病院内部の取材は個人情報の壁もあり難しい。精神科病院で実際に何が起きているのか、自分の目と耳でありのままを知る機会にもなった。

病院には奇声を上げる人もいれば、社会の受け入れさえ整えば退院できる人もいた。

辞書を何年も読み続けたり無心にビーズ飾りを作ったり、大切な居場所になっていた。

驚くほどみずみずしい感性を持っている人もいた。会話の返答に数十分かける人も。なぜいつも私の隣に座るのか

と思ったら「呼吸がとても穏やかだから」。呼吸で人との心の距離感をつかむ人もいた。彼ら彼女らと話すとき、信じられないほど心が安らいだ。何て優しいんだろう。花を愛で、皆で歌い、よく笑った。

精神保健福祉士の仕事は、そんな患者らと関係を深めながら、スムーズに社会に戻れるよう退院支援をする。退院時の福祉制度の申請や住まいの相談などに応じながら患者の伴走者役を担う。

だが現実は、次々に訪れる入院者の対応に手いっぱいの実情もある。社会から追い出されるように病院に舞い戻ってきてしまう人もいた。

忘れられない現場がある。外から鍵のかかった保護室だ。音などの刺激情報を遮断し、いったん落ち着いてもらう隔離された場所。自殺防止のため、壁に留め金は一切なく、便器はむき出しで、中の様子を確認するカメラが二十四時間回っていた。

「アホ」「窒息」。保護室の柱にそんな文字が彫られていた。室内に鋭利なものは持ち込めない。服のファスナーか爪か。相当な力を込めて彫ったのだろう。ジリジリと一画一画波打つみみず腫れの文字を、私は何度もなぞった。

なぜ刻んだか。どんな思いだったか。本当は何が伝えたかったのか。医療と福祉は時に相いれない。医療の常識が、人権が柱の福祉では受け入れられないことはよくある。柱の刻印の意味を問い続ける。その文字に触れた者の使命のように思えてならなかった。

実習を終え日常に戻った。だが、あの純真無垢な笑顔を向ける人たちがいないことに気づく。いかにこの社会が、社会の流れに乗れる人だけで構成されているかを思い知った。冒頭のバスのように、精神を病む人を異質な存在とする偏見は社会に横たわる。

見ようとしなければ見えない世界は確実にある。その最たる存在が精神医療だと痛感した。まずは、この現状を知るところから始めたい。

（特別報道部、社会福祉士）

ご静聴ありがとうございました…